

仏女新聞

仏女新聞社 飯島可琳

宝山寺特集！

宝山寺は生駒山の中にあるお寺ですが、地域の人に親しまれ、人でにぎわっています。宝山寺のお堂の中におられるお像是普段拝観することができませんが、宝山寺はいろいろな楽しみ方をする事ができます。

その一



「万燈会を楽しむ」

宝山寺では秋分の日「万燈会」が行われます。階段をのぼった奥の院は木々にかこまれてるので、空が暗くなる一足先に灯りを満喫できますが、階段の下の本堂があるスペースは奥の院までの道よりもたくさんとうろが置かれてるので、万燈会気分によりひたる事ができるかもしれません。(個人差があります)



ます。(私のおすすめは奥の院です。宝山寺はにぎやかなイメージがあります)

す。宝山寺はにぎやかなイメージがあります。奥の院は文字通り山の奥にあるので山の自然にかこまれた静けさを味わう事ができます。木の隙間から日が差し込んでくる様子もきれいです。また、お坊さんによる法要と参拝もあり、参拝者がお坊さんの後に続いて灯籠が取り付けられた杓を持って奥の院まで行く儀式がありました。お坊さんが通り過ぎてからも参拝者の列が長く続いています。万燈会のために各地からたくさんの方が集まっていたのだ



と思います。

その二

「景色を楽しむ」



宝山寺の近くには「景色を楽しむ」事ができる場所「がいくつもあります。例えば奥の院に行く道の途中にある宝塔の近くからは境内を見渡すことができます。さらに奥の院にある大黒天のお堂からは「生駒」を見渡

その三

「線香を楽しむ」



宝山寺といえば線香といつていいほど、宝山寺に近づく線香の香りがします。あまりにもたくさんの方が線香をお供えして、線香を燃やす壺の中では勢いよく火が踊っていました。

その四

「マークを楽しむ」



宝山寺に行くくとこの三つのマークをよく見かけると思いますが、なぜ三つも

その五

「宝山寺の魅力を楽しむ」

これから紹介するのはお寺で働いている人にとっての「宝山寺の魅力」です。こちらも浜渦さんに話をうかがいました。

浜渦さんの宝山寺の魅力は宝山寺に来てからなにも悪いことが起こらず、なにごととも着々と進むと言うことだそうです。さらに歓喜天さまは位が低いので、人間の気持ちがよく分かり、小さな願いもさくさくと受け入れてくれるのではないかと話されています。

ちなみにコーナー

宝山寺はお寺ですが、神様も祀られています。しかし、これはものすごく珍しいことでもありません。東大寺の山側には手向山八幡宮という神社があります。それには



お寺を守るために神様をお祀りするということがあるので、宝山寺のように境内のど真ん中に神社があるお寺はあまり見たことがありません。

その六

「やはり仏像を楽しむ」

本堂



宝山寺の本尊は不動明王です。今まさに動いているかのような勢いがあります。怒りながら爆発するのかわからないはずですが、ほおに入ったしわは、不動明王が何かに耐えているのを表しているのでしょうか。



この象は本堂の十一面観音の台座の下にひそんでいました。「ひそんでいました」というと象に

失礼な気がしますが、これを読めば納得していただけたと思います。象が仏の台座になっている姿は普賢菩薩や帝釈天(例えば東寺)にみられるのですが、獅子のように台座の下で見守っている姿は見たことがありません。獅子が台座の下にいると隠れて驚かそうとしているように見えるのですが、仏教界の象は目を三日月の形にして笑っているのです。暗い台座の下にいてとなにか目論んでいるように見え「象がひそんでいる」と思ってしまうのです。宝山寺の大黒柱の聖天さまは象の姿をしています。それにちなんで作ったので十一面観音の台座の下に象がいるそうです。



奥の院までの道にはお地藏さんや観音さまなどたくさんのお石仏がならんでいます。宝山寺には一円と五円の両替システムがあるので、ひとつひとつの石仏にしっかりと参りしながら奥の院へ進むことができます。

二つのシンボルを組み合わせた賽銭箱

